

忘れえぬ演劇研究者

—関根只誠—

法 月 敏 彦

キーワード：歌舞伎、『名人忌辰録』、『戯場年表』、『東都劇場沿革誌』、『浮世絵百家伝』

はしがき

わが国では、明治期以降、多数の演劇研究者が豊かな研究成果を残した。今日の私たちはその恩恵を蒙りつつ自らの研究を進めている。どのような演劇研究者が存在し、またどのような研究成果が残されているのか。現状では著名な演劇研究者すべての伝記が残されている訳ではなく、その研究成果も正確に把握されていない。

本稿では、近代における歌舞伎史の先駆的著作『戯場年表』の編者である関根只誠を取り上げ、披見できた書誌情報の整理を柱として、その研究成果を概観する。なお、『戯場年表』は、伊原敏郎編『歌舞伎年表』全8巻をはじめとする歌舞伎史の研究基本文献の嚆矢となった稿本である。

1. 関根只誠という演劇研究者

関根只誠(1825～1893)に関する記述のなかで最も簡潔で要点を押さえていると筆者が考えるのは、『演劇百科大事典』(平凡社)の記述である。

演劇研究家。文政八年江戸日本橋に生れた。本名七兵衛。代々徳川家御用をつとめた家柄であるが、只誠の時御魚御用を勤めた。少年時代から書を好み、蔵書家としてまた劇通としても知られた。芝居好きで交友もひろく、石塚豊芥子・岩本活東子・河竹黙阿弥・仮名垣魯文らや俳優・芸人ともまじわった。その著に『名人忌辰録』『演劇叢話』『戯場年表』『東都劇場沿革誌』『浮世絵百家伝』などがある。明治二六年四月一八日没。子息にも劇壇に関係ある勉強をさせ。関根正直・同黙庵がある。(山本二郎)

本稿で詳しく述べるが、関根只誠(以下、本文中は只誠と略称する)は偉大な演劇研究

者であったが、同時代の記述や親しい知人（小中村清矩、前田香雪、大槻如電）の文章を素直に読んでいくと、演劇研究者という枠を越えた読書家、雑書の抄録に励んだ文人、あるいは小説や野史を好んだ「元禄学びの長」（『くまなき影』^①）という文人の姿が見えてくる。

もとより、只誠の生きた幕末から明治初期に歌舞伎をはじめとした演劇を研究するという概念は未だ生じておらず、したがって今日の我々が披見する演劇研究書の類は出版されていなかったのも、只誠の編著というのはすべて自筆稿本であった。そして、その稿本は、嫡子関根正直（1860～1932。以下、本文中は正直と略称する）によって「一めぐりの正忌までに、遺稿のうち、何をがな印刷し、亡父のかたみとして、旧知のかたがたに、贈り参らせばやと思ひし」（『名人忌辰録』）という動機で初めて世に出た。『名人忌辰録』以降、正直の更なる尽力によって、父・只誠の偉業が公刊されたのである。さらに、正直の死後は、息子の関根俊雄（1906～?）によって蔵書の整理と『せきね文庫 第一期』の公刊という形で継承され、今日に至った。

以下、実際の編著と諸著の記述を基に只誠の学究を概観する。

2. 只誠の人生と学問姿勢

まずは只誠の人生を概観する。参考とした資料は同時代の記述である、前出の『くまなき影』、『名人忌辰録』の序文、すなわち、小中村清矩、前田香雪、大槻如電の文章である。また、適宜、『歌舞伎新報』の追悼文、田村成義編『続々歌舞伎年代記 乾』の追悼記事^②を参照した。『続々歌舞伎年代記 乾』記載の記事は出典が明らかではないため（ ）内に記して区別した。

文政8年（1825, 0歳）江戸（茅場町）に生まれる。名は正亮（庄三郎）、七兵衛と称す。初号は東紫、後に只誠と号す。後年、劇神仙とも呼ばれた。（別号、東紫楼、木公楼）

（後に檜物町に住す）（松屋と号す）（通称は松庄で、公儀の御魚御用を勤む）

安政7年（1860, 35歳）長男又三郎あるいは直三郎、後の正直、誕生。

文久3年（1863, 38歳）次男金四郎、後の黙庵、誕生。

（維新後、本郷日蔭町に住す）

明治26年（1893, 68歳）4月18日、本郷森川町で病没^③。

只誠の学問がどのようなものであったのかについて、知人と家族（正直）の記述から抜粋すると次の如くである。

このんで小説野乗にわたり、尚古にふけり、古画書を愛し、古雑書に当り、所謂元禄学びの長（『くまなき影』）。

若き時より読書をいたく好まれて、暇あるをりをり野乗雑書を読みわたし、抄

録するを生涯の楽しみとせられければ、其抄本遂に貳百五拾余卷の多きに及び、また戯曲・小説・狂歌・俳諧など近世の文事に精しくして、人の問ふことあれば、明確に答へられしにより、世に平民文学の称を得られたり（小中村清矩『名人忌辰録』序文）。

万のことに心入深く見聞くにしたかひて記しと、められしもの幾百卷かある（前田香雪『名人忌辰録』序文）。

博識強記は。世の知る所なり。常に言ふ。真面目の事实は学者ぞする。人間世界俗事俗物。日々夜々の出来事。これ我がなすべきものと。これを聞けば。これを筆にし。これを見れば。これを墨にし。其書実に三百余卷に及ぶ（大概如電『名人忌辰録』序文。句点は原文の儘）。

亡父は若き時より、読書抄録を好みたるが、中にも演劇の事どもに、博く通じたりしかば、さる筋の事といへば、諸方よりしばしば尋ね問はるゝまゝに、さまざまの考説どもを記して、需むる人に送られたりき（関根正直『演劇叢話』はしがき）。

要するに、家業の合間をぬって野乗つまり野史に関する雑書を漁り、読み、その抄録を作成した。また、その、いわば只誠筆録の資料集を人の求めに応じて提供したというのである。

このような学問の方法は、たいへんに手間がかかり、且つまた新規の情報が見つかった場合、書き込みを追加するという堅実な研究姿勢である。時間的余裕のない状況での、細切れの時間を用いた研究方法とも言えるであろう。後述するように、このような抄録という方法は、只誠から、『歌舞伎年表』の編者である青々園伊原敏郎（1870～1941）へと引き継がれていった。

3. 只誠の業績

既に述べた通り只誠の編著はすべて刊本ではなく自筆稿本であり、没後の出版は正直と弟の演劇研究家・劇評家黙庵こと関根金四郎（1863～1923。以下、黙庵と略称する）によって刊行された。したがって只誠の業績を述べる場合、これらの刊本だけでなく、大正12年の関東大震災、昭和20年の東京空襲での焼失を経て、辛くも残存した『せきね文庫』の自筆稿本、および写本などに拠るのが妥当である。

まず、関根俊雄著『関根文庫目録』から、現存する自筆稿本を書き抜いておく。只誠が自写した刊本などは省いた。検索の便を考慮して目録の頁を併記した。一部は『せきね文庫 第一期』として複製本が出版されている。

7 頁 只誠埃録・只誠翁稿本・只誠雑稿・只誠漫筆

36 頁 劇場年表（戯場年表）

37頁 俳優師弟系譜・演劇雑記纂(劇道百事録)・演劇叢書・東都歌舞伎雑纂・市川水の筋・歌舞伎道成寺考・七代目白猿伝・劇場太平櫓・俳優記事雑纂・東都劇場沿革誌(改版の再校ゲラ。国立劇場改訂版の原稿)・戯場年表第十九冊・東都歌舞伎故実・只誠雑纂・枝折・従安永至明治年表草稿・年表草稿・明治十四年巳年中戯場日誌・(四代目市川団十郎外)・(尾上系俳優列伝)・諸芸新聞各座筋書予算記・(歌舞伎関係草稿集)

この他、維新後に沽却したもの^④、関東大震災で焼失した松廬舎文庫(安田文庫)へ納めたものを含めると自筆稿本と自写刊本の数量は夥しいものに及ぶ。

以下、刊本の「刊記」「発行所」「序文・跋文」などの書誌情報を記し、追加情報と筆者の見解は「内容」「付記」で述べるという形式で論述した。

『名人忌辰録』

・刊記：明治27年初版。大正14年改版。昭和52年復刻版。

・発行所：吉川半七。改版、六合社。復刻版、風俗絵巻図画刊行会、ゆまに書房。

・序文・跋文：

「関根只誠翁の性行 明治廿七年の四月 七十三のよはひを重ねたる 小中村清矩^⑤」

「(無題) 前田香雪^⑥」

「(無題) 甲午七月 如電大槻修敬白^⑦」

「亡父の遺稿を印行するゆゑよし 明治廿七年七月 関根正直しるす^⑧」

・内容：いろは順で、国学者色川三中こと瑞霞園から画家鈴木芙蓉の子鈴木小蓮まで、「俳優忌辰録」三代目岩井半四郎梅我から四代目助高屋高助高賀まで、「景辰録情死録」但馬屋おなつ手代清十郎から芸者みよ吉ち、み屋新助まで、「鑑刑死録」丸橋忠弥から国定忠治事忠次郎まで約三千名の、江戸時代に何かを成し遂げて名を得た人名に関して、その来歴や墓誌を簡潔に収録している。

その大きな特色は、たとえ高貴顕官として著名であろうとも「文芸を嗜み風雅に遊べる人々」(関根正直「忌辰録の改版に際して」)しか採録しないという徹底した見識である。そして、この見識と多岐に及ぶ人名の収録こそが、正直をして亡父の形見としてまず出版すべき一冊と考えた理由であろう。

・付記：初版は上下2冊本であったが、改版にあたって俳優忌辰録を合綴して1冊本とし、初版では省かれた情死録と刑死録を収めた。初版の誤謬等が訂正された改版をもって本書の原本とすべきであろう。

『演劇叢話』

・刊記：大正3年初版。平成8年、平成13年復刻版。

・発行所：広文堂書店。復刻版、クレス出版(近世文芸研究叢書)、皓星社(『日本人物情

報大系』第82巻(諸芸・諸職編2)

・序文・跋文：

「はしがき

本叢話に収むる所の各篇は、いずれも亡父只誠翁の遺稿を、更に増補したるものなり。亡父は若き時より、読書抄録を好みたるが、中にも演劇の事どもに、博く通じたりしかば、さる筋の事といへば、諸方よりしばしば尋ね問はるゝまゝに、さまざまの考説どもを記して、需むる人に送られたりき。其の草稿の遺れるものゝうちより、此度まづ七種をとり出でて、世に出す事としたり。

「芝居年浪草」は、故田中不二磨子爵の需により、歌舞伎年代記を簡易に刪修したるものなり。後同子爵の勧めによりて、別に最も精しく、且古来の演劇に関する巷談世評等をさへ添録せしもの、「東都劇場年鑑」と名づけて、十七冊を編じたり。是れは、「江戸歌舞伎」と改題して、近日開版の予定なれば、重複する如くなれど、是れは彼れの初稿とも見るべく、編述の趣き全く同じからざれば、かたがた捨てがたくて本叢書中に収めたるなり。

「松のみどり」「沢むら千鳥」「雀のさきがけ」は、別に俳優師弟系譜といふ書を編述せるが中より、松本、沢村の家系、四世歌右衛門翫雀の伝として、抄説せしもの、「河竹のふたよ」は、久しき友なりし二世河竹新七黙阿弥翁の没後、親しく見聞したる所を叙述したるものなり。

「歌舞伎道成寺考」は、先年さる人の請ふにまかせ、貸し与へたりしが、其の人、何とやらむ変名の下に、己が著述の如く装ひて世に出だしたるは、いかなる悪戯ぞや。

「市川水の筋」は、九世団十郎の請により、書いて与へしものなれば、九世の伝はなかりしを、今回書肆のあつらへに付き、弟金四郎の、補ひたるものなり。

総じて急卒の起稿にかゝれば、誤脱も多からむ。校補また頗る杜撰なるべし。博雅の諸君、補ひ正し給はらば幸なり。

大正三年五月上浣 関根正直しるす(句読点は原文の儘)

・内容：大扉内題に「関根只誠遺稿 文学博士関根正直関 黙庵関根金四郎補」とあり、本書成立の経緯が知られる。黙庵の「補」とは本書「市川水の筋」のことを指している。また、口絵として、「関根只誠翁筆蹟(歌舞伎道成寺考の一節)」一葉が挿入されている。

また、目次に各叢話七編の内容を簡単に記しているので再録する。「はしがき」の記述と順番・表題の表記が異なっている。

「芝居年浪草」俳優作者、及、劇場年表

「松のみどり」五代目松本幸四郎の話

「さはむら千鳥」沢村家の代々

「河竹のふたよ」古河黙阿弥の事

「雀のさきがけ」四代目歌右衛門伝

「歌舞伎道成寺考」(説明なし)

「市川水の筋」市川の家系

ところで、本書「はしがき」の記述は、以下の点が明らかになるため頗る重要である。

(a)「諸方よりしばしば尋ね問はるゝまゝに、さまざまの考説どもを記して、需むる人に送られたりき」、つまり、只誠の抄録という地道な作業が単なる自己の愉しみという枠内にとどまらず、具体的な需要を前提にしていたという事実。

(b)「芝居年浪草」は、「東都劇場年鑑」17冊に増補され、それは「江戸歌舞伎」として出版する計画があったという事実。いわば、『東都劇場沿革誌』の前提となる作業があったという事実。

(c)「歌舞伎道成寺考」が改題され他者の著述として出版された事実。因みに、事実関係は不明ながら、雪の門主人編『演劇道成寺考』明治24年刊という冊子(国立国会図書館所蔵)が存在する。

・付記:「河竹のふたよ」が「久しき友なりし二世河竹新七黙阿弥翁の没後、親しく見聞したる所を叙述したるもの」(本書はしがき)であるならば、明治26年1月22日の黙阿弥の死から、同年4月18日の只誠の死までの間に綴られた文章であり、只誠最晩年の著述の一本ということになる。

『東都劇場沿革誌』全5巻6冊

・刊記:大正5～6年初版。昭和58～59年改訂版。

・発行所:珍書刊行会・演劇図書同好会。改訂版、国立劇場芸能調査室『東都劇場沿革誌料』上下(歌舞伎資料選書)

・序文・跋文:第一巻巻頭に凡例、

「出版に就て

一 本書は文学博士関根正直氏の厳堂只誠先生遺稿の一にして博士が珍襲に係り、本会が続いて刊行せんとする『俳優師弟系譜』の姉妹編なり、今博士が好意により爰に本書を出版し得たるは、深く本会の光栄とする所なり。

一 本書は只誠先生手書の稿本六巻より成り、一頁約十八行三十字詰の細字を以て記され、鼈頭には更らに細字を以て詳註を附したり。

一 今刊行に際しては整版の便宜より、鼈頭の詳註を本文の次に三字下げて置き、時に(一)(二)等の符号を以て、本文との関係を明かにしたり。

一 本書は本会前期以来浄書校合に従ひ、仮名遣ひ其他すべて原本に従へり。

一 挿画は製版の可能なるものは盡くこれを収め、他書より引用したるものにして原本の判明せるは、明確を期するため複製を避けて原本より直ちに転写したり。

一 本書に対する跋文は、関根博士巻後にこれを附せらるべきを以て、今改題せず。」

第五巻末に跋文、

「演劇に関する亡父の遺稿数種あれど、いつれも未完の書にして、世に公にすべくもあらず、本書も亦其の中の一にて、増補し訂正すべき所素より少からじ。殊に巻末森田河原崎

両座の記事は、蕪稿中の蕪稿にして、唯僅少なる材料を並列したるに過ぎざれど、この道にくらき余は、之を修成する事を得ず。深く慚愧に堪へざるなり。然れども川上邦基君の、切に版行せん事を勧めらるゝ厚意辞し難く、原稿のまゝを、君に託して謄写せしめつ。魯魚の誤さへ加はりつらむ。印刷了りて跋語を識さむことを求めらるゝに、更に言ふべき所を知らず。噫父の世をさりしより既に廿余年、今に至りて其の志をなす事能はず、空しく泉下に不孝の罪を謝する外なり。

大正六年五月 関根正直識す」

・内容：江戸歌舞伎（東都）中、中村座を中心とする興行関係資料を収録して整理し、同様に、市村座、森田座、河原崎座の関係資料を掲載したもので、「禁令・御触書・奉行所書留・座元家文書・番付など各種資料（中略）劇場・興行機構・役者・風俗の方面の編年体資料集成」（服部幸雄「解題」『東都劇場沿革誌 下』）である。

・付記：本書の書名は、第四編以降に相違がある。

第一編 大扉「伊原敏郎撰輯 芝居双紙」内題「東都劇場沿革誌 関根只誠著」

第二編 大扉「伊原敏郎撰輯 芝居双紙」内題「東都劇場沿革誌 関根只誠著」

第三編 大扉（国会図書館本、欠）内題「東都劇場沿革誌 関根只誠著」

第四編上 大扉「芝居双紙 第四編上 東都劇場沿革誌 卷之四」内題「東都劇場沿革誌 関根只誠著」

第四編下 大扉「芝居双紙 第四編下 東都劇場沿革誌」内題「東都劇場沿革誌」

第五編 大扉「故関根只誠先生遺稿 東都劇場沿革誌 卷之五」内題「東都劇場沿革誌 関根只誠著」

『浮世絵百家伝』

・刊記：大正14年

・発行所：六合館

・序文・跋文：

「はしがき

浮世絵師の事を集録したるもの、大田南畝子の浮世絵類考を始めとす。此の書を岩瀬京伝の著とするは誤なり。実は南畝子かりそめの筆すさみにて、之に笹屋邦教の浮世絵始系を附記せしは、寛政十二年の夏なりきといふ。後享和二年の冬、京伝これが追考を物せしを文政元年に至り、南畝子また自著の卷末に綴り合せて一冊となしぬ。其の後、菊地三馬更に補正する所ありしもの、遂に広く転写せられたるなりと、嘗て先人の語られしが、或は記憶の謬りもやあらむ。

浮世絵始系の編者邦教は、日本橋本銀町一丁目に住せし笹屋新七とて、縫箔工なりし由、南畝子の記に見ゆ。

増補浮世絵類考の成りしは天保四年にて、編者時雨岡の隠者无名翁とは、当時根岸に住せし溪齋英泉池田氏なり。齊藤月岑亦之に加ふる所ありしを、先人の借り来り。手写して家

に蔵せしは、過ぐる慶応三年の春と識しおかれたり。

本伝は以上諸家の著述に基き、なほ自己の見聞によりて刪訂し、且知友高島藍泉氏にもはかり、新に最近世の人々をも補足して、脱稿せしは明治十八年の春なりき。

本伝の末には、世に謂ふ浮世絵師ならざるもあれど、交遊ありし人、或は多少此の系をひきて因縁ある、又は小説の挿画、刻本の下絵などかきたるも、准じて組み入れたりとなり。斯くて此の稿本は、先人在世中より、しばしば知友の望みに任せて、閲覽を諾せし事あり。それからそれと伝はりけむ。他人の著書に、採録せられたる点も少からねば、今にしては、さきの雁があとになりたる嘲笑をも受くべし。

されど先人折角のわざを、空しく廃棄するに忍びず。かゝる筋には門外漢の己れなれども、こたび聊か稿本を刪修し、印刷して泉下の霊に捧げ、且は世に出だす事としたるなり。

大正十四年九月 関根正直記す」

・内容：岩佐又兵衛以下74名、追録として堤等琳以下14名、合計88名の浮世絵師伝である。追録の人名は「世に謂ふ浮世絵師ならざるもあれど、交遊ありし人、或は多少此の系をひきて因縁ある、又は小説の挿画、刻本の下絵などかきたるも准じて編み入れたり」という人選であった。

・付記：原本の成立は、上記はしがきに記されているとおり「脱稿せしは明治十八年の春」であった。

「俳優系譜」(一)～(七)

・刊記：大正14年11月、昭和3年2月、同年3月、同年4月、同年5月、同年8月、同年9月。

・発行所：歌舞伎出版部

・序文・跋文：表題の著者名は、「俳優系譜 関根只誠編」とあり、(二)以降は「俳優系譜 故関根只誠稿 関根正直校」と記されている。

連載(七)の末尾に跋文がある。「此の原稿は、去る明治廿五六年の頃、亡父の書き捨てたもので、後年之を大に増補訂正し、「俳優師弟系譜」と題して、臨終の際まで七冊書きつゞけましたが、該書は大震災の時、本所横綱の松廼舎文庫で悉く烏有に帰しました。

ですから是れは全くの未定稿で、上欄に追記したり、所々に付箋をしたまゝ、未だ浄書もせず置かれた程で、遺漏錯誤固より少なくない。先年上版した「俳優忌辰録」の記事よりも疎略ですから、今ごろ世の中に出すべきものでないと思つて、蔵閉しておいた。然るに或人の懇願に任せて貸し与へた所から、段々に伝写されて、ついに吉田暎二さんの手に入り、去年初めて本歌舞伎研究の紙上に掲載されたのを見て、頗る驚き且恐縮した。

驚いたのは外でもない。前述の通りの次第だからです。折から丸岡さんに御面会の機会を幸ひ前の事情を申して、其の写本を見せて貰つた所が、案の如く心なき者の筆写と見えて、上欄の追記や付箋の入れ所をも取りちがへ、文句の誤脱錯乱など、何とも申しやうがない。さればとて既に最初の一端を出されたからは、今更中止するもいかゞと思ひ、私か

ら申出て校正を引受けた。然る処元来私は、劇道に不案内だから、引受けがひなく錯誤の校訂も十分出来ず、読者諸君を初め歌舞伎研究部、又亡き父にも不敏を謝し、又特に丸岡さんの御好意と、印刷所製版諸氏に多大の労をかけた事を深謝する。

爰に最初からの事情を一言して、各方面の御諒恕を悃請致します。

昭和三年九月 関根正直

・内容：『歌舞伎研究』第六輯、第廿一輯、第廿二輯、第廿三輯、第廿四輯、第廿七輯、第廿八輯に連載。

(一) 77-87 頁 中村勘三郎系

(二) 113-127 頁 市村羽左衛門系・森田勘弥系

(三) 97-110 頁 市川団十郎系

(四) 86-107 頁 松本幸四郎系・瀬川菊之丞系・市川団蔵系・市川八百蔵系・坂東三津五郎系

(五) 99-127 頁 沢村系・坂東彦三郎系・岩井系・尾上菊五郎系

(六) 87-108 頁 嵐系・浅尾系・芳沢系・中村系

(七) 99-115 頁 大谷系・坂東三八系・市川鯉十郎系・その他

・付記：(一) は、同誌第六輯 109 頁「編輯断語」に「本輯には故関根只誠氏の「俳優系譜」中村勘三郎の条だけを掲出した。氏の手記が多く十分に完結してゐないのに漏れず、この「俳優系譜」も完全なものとは云ひ難い、しかし、完全な俳優系譜を所有しない現在では一つの資料ともなると信ずる。」とある。既に記した関根正直の跋文によって、これが杜撰な転写本を基にした印行であることがわかり、連載の(二)から著者名の変化した理由がここにあった。

また、(七) 連載終了時の同誌第廿八輯 115 頁「編輯断語」に「七回にわたつて連載されました関根只誠氏の遺稿「俳優系譜」は今回を以つて終りとなりました。此の原稿については種々の行きさつがあつて、関根博士も末尾に述べられてゐますが、本誌第六輯に最初一回分が掲載されました時は、其写本は島田筑波氏から関根博士からは発表の了解があるからとして渡されたが為めでした。処が、島田氏の此の話は、同じく関根只誠氏の「戯場年表」について私との間に問題が起きた様に実にいゝ加減のものでした。その為めに、関根博士には申訳ない事になつたのです。」と吉田暎二による事情説明がある。

『戯場年表』(写本)

・刊記：昭和 53 年

・発行所：三一書房(藝能史研究会編『日本庶民史文化史料集成』別巻)

・序文・跋文：解題・校訂、菊池明・林京平

・内容：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵の写本、全 13 冊の翻刻。筆写者は不明であるが、関東大震災で烏有の帰したと考えられる原本(第十九冊のみ現存)^⑨は、只誠から関覧・筆写を許された伊原敏郎(青々園)によって後の『歌舞伎年表』の土台となった^⑩。

本書は寛永元年～天保五年に及ぶ江戸歌舞伎の年代記であり、「中村勘三郎の猿若座創設にはじまり、毎年各座毎にその狂言と配役を中心に、そのときどきの各座の出来事、劇場や舞台、見物席の構造、歌舞伎の関する法令、芝居風俗などを記載」(同書解題)したものである。

・付記：同書解題に「筆跡は一貫して整然としており、書きなれた同一人の筆になったことは明瞭である。ただ、かなり短期間の筆写らしく、誤字脱字が多く、それも内容的に初歩的な誤りを冒している点、筆者は能書家ではあっても、演劇とは縁遠い者のように思われる。」とあり、書写した人物は不明であり、昭和十一年十一月に演劇博物館が購収したものであるという。伊原敏郎のフサ夫人の思い出話「私はいつも原稿の清書や挿絵の透写しをさせられました」(「感謝」)という文章を読んで、この写本はフサ夫人による副本の可能性はある。

4. 研究成果とその評価

只誠の研究姿勢は、一定の見識によって取捨される情報の収集とその筆録・書き入れであった。それは、誤解され易い言葉であろうが「珍書蒐集」ということである。ただし、珍書を集めることだけに主眼が置かれていたのではなく、その珍書から重要と思われる情報を書き抜き整理することに重点があった。複写機のなかった時代故に筆写という手段で情報が蒐集された。

只誠が生きた幕末から明治初期は、江戸時代の好事家という段階から学問という段階への過渡期であったと言われているが、それは一方で、文人が学者と呼ばれていく過渡期でもあった。印刷技術や後の複写技術によってその風貌は大きく変化し、さらに大学校の誕生などによって学者はやがて研究者と呼ばれるようになった。したがって、只誠という好事家の文人は、学者・研究者と呼んで差し支えないと考えている。

只誠の成した業績の規模を示す適例は、嫡子正直によって上梓された『名人忌辰録』であろう。まさに広範な諸書から必要な情報だけを集めた編著であり、その根底に人物選択の鋭い見識があった。また、本稿では詳しく述べる余裕のなかった『只誠埃録』全二百五十五冊(九十八冊欠)などの資料集成は、その一部分が本稿で扱った刊本の基盤であった事にとどまらず、広範な情報蒐集の成果であり、その成果は同時代の友人知人に知れ渡っていた。ことに演劇関係では、この事実によって只誠を「劇神仙」と評価したのである。

また、同時代の評価から更に進展する契機は、伊原敏郎による『歌舞伎年表』にあり、さらにその流れは、『近代歌舞伎年表』に至ったものと言える。また、このような基礎研究の流れは、『近世邦楽年表』『義太夫年表 近世篇』などにも継承されたと考えられる。

あとがき

近代の演劇研究、とくに歌舞伎研究の先駆者のひとりである只誠の業績を瞥見し、その後世への影響力の大きさに今更ながら驚くばかりである。本稿で述べ来った只誠による諸資料からの書入れという地味な作業の重要性は、年表編纂などに従事した経験のある者には十分に理解できることであろう。長期間に及ぶ作業の途次では、体調なども関係して、思わぬ誤謬・誤写にいたることも少なからずある。しかしながら歴史研究は、このような一文字一句一行の書き入れによって進展するのである。

注

- ① 『くまなき影』 皎々舎梅嶺編、細木香以序、仮名垣魯文跋、廣岡屋幸助板 1867
 関根只誠の項
 (上段) 絵の中の文字「雪によせる木」
 「関根氏、初号東紫といふ、性急にして尤奇僻あり、このんで小説野乗にわたり、尚古にふけり、古画書を愛し、古雑書に当り、所謂元禄学びの長にして、鎌倉屋豊芥・達^{とく}屋吾一の花主たり、好古漫録の書を百余巻綴り、家に収めて誠駭只録と号す」
 (下段)「遠九連天藻於那慈 牟礼名利渡留雁(をくれてもおなじ むれなり渡る雁) 只誠」
 影絵の横顔
- ② 『続々歌舞伎年代記 乾』 p.656
- ③ 『歌舞伎新報』掲載の死亡広告：
 実父七兵衛(只誠翁) 儀病氣之處療養不相叶今十八日午前五時死去仕候間此段生前辱知諸君へ御報申上候成
 葬送之儀は来る二十日午後三時染井墓地
 本郷区森川町一番地
 明治廿六年 長男 関根正直
 四月十八日 親戚 渡辺仲蔵
- ④ 関根只誠が沽却した自写刊本、錦絵、番付類の一部は、現在アメリカ合衆国ボストン Museum of Fine Arts, Boston の東洋美術部長オフィス内に収蔵されている。筆者は1988年夏、これらを調査した。
- ⑤ 小中村清矩(1822～1895)は国学者で『古事類苑』の編纂、『歌舞音曲略史』などを著した。帝国大学教授、貴族院議員を歴任。以下の序文は、今回改めて筆者が初版より翻刻した。新字に改め、適宜読点を付した。大正14年刊の訂正改版には、この追悼文の翻刻が掲載されているが闕字があるので本稿で補った。
 「関根只誠翁の性行
 翁、名は正亮、只誠と号し、七兵衛と称す、江戸の人なり、若き時より読書をいたく好まれて、暇あるをりをり野乗雑書を読みわたり、抄録するを生涯の楽みとせられければ、其抄本遂に式百五十拾余巻の多きに及び、また戯曲・小説・狂歌・俳諧など近世の文事に精しくして、人の問ふことあれば、明確に答へられしにより、世に平民文学の称を得られたり、翁、たけ高く、声大きかりけれど、性温和にして親みやすく、義侠の質あられしかば、これかれの人よりさまざまの事をよざしを、皆よく果して其望みをかなへられしかば、それを徳として慕ひよきもののおほかりき、また殊に記すべきは、梨園の戯を深く好まれしわざにして、年ごろ演劇の歴史、俳優の家系の類を考へられたる著書百余巻あり、されば其談に及ぶごとに珍らしきかたりごとお

はく、主客日かげの傾くをわするゝ事、常なりければ、其道に至り、ふかき識者として劇神仙と呼ばれたり、性壮健なりければ、蔭高き松の齢もとたのまれつるに、明治二十六年の四月枝ふきしを風病をわづらひて、その十八日つひに六十九といふ年にて身まかれぬ、おのれ翁とはとしごろの交あるちなみに此遺稿に一言そへてよと請はる、さりや翁なくなりて後、近世の事実をたづぬる折には翁あらばとおもひ、梨園の歓場にかたらふべき友少くなりては、翁なくてとしのばるゝに、せめてしたはるゝ心をやらんには、需めのまにまに筆をぬらさゞらめやとて、わづかなる言の葉ながら翁の性行をかくなむ

明治廿七年の四月 七十三のよはひを重ねたる 小中村清矩

- ⑥ 大正14年刊の訂正改版で削除された、小説家・美術鑑定家の前田香雪（健次郎。1841～1916）の序文。なお、この序文は、国立劇場芸能調査室編『東都劇場沿革誌料』下巻「解題」の翻刻には含まれていないため、今回新たに筆者が、新字に改め、適宜句読点を付して翻刻した。「わか皇国人は報本反始の努めを全うするよきならひありて、其道々に高きひき、違ひこそあれ、其志は専ら皇国の本つ教へを千よ、ろつよに伝へもち申にてかはらふことなき基となるにこそありけれ。さるは神代の古きつたへよ、の変遷をみあよらめて後の鑑とし言語のもと、事物のはしめを考へわたしなといとさ□□なるへし。昔よりかゝる道々に至り深き心は□も更なり。はかなきわさを伎、あそひ女、管絃舞曲に名あるたくひ、さらぬもひとはしことなる行為ありし人のうへを記しと、めて後世につたふるものある。そもまた報本の努めに心入るゝ人のわさになん。故関根只誠翁はれかほるき丈にて万のことに心入深く見聞くにしたかひて記しと、められしもの幾百巻がある。そか中にからのやまとの学者たちをはしめ世に其名知られたる限り高きやしきをいはす其小伝、みまかれる年月日墓所をさへにかきつめおけるあり。古はもろこしに万世統譜といひほかの国々に人名辞書などいへる類にて□にもほる有けり。忌日のみ集め記したる□ひよる日墓所知るたよりに物したる古墳志墓所一覧などはあれとあるは一地勢に限り本は見る処広からてもれたるも多かるをうれなみてかう記しあつめられしなるへし。されは其人々のかへしきしのふたるなるのみにて歴史学の為にも知益おほく報本反始のこゝろはへも隈なくみえしられていとめてたきをそかまな子正直ぬし、よになき翁の志をむなうせしとちの実すり巻としておのれにも一こと添へよとこはれたり。おのれ其重きつとめをわきまふるきはならねとしたしかりしゆかりにえもいなひあへす筆とれるは明治廿七年七月なきひとらくの魂まつりするところになんありける前田香雪」
- ⑦ 漢学者・邦楽舞踊研究家の大槻如電（1845～1931）の序文。句点は原文の儘。「江戸児は臍月の鯉の吹流しといへる諺あり。説く者曰く。口ばかり大きく。腹腸は無しと。嗚呼これ何の言ぞや。端午は男児の佳節なり。男児の佳節にして。鯉魚を掲ぐるは。その一躍龍門の氣象に取るにあらずして何をかせん只誠関根翁は。江戸児なり。博識強記は。世の知る所なり。常に言ふ。真面目の事実学者ぞする。人間世界俗事俗物。日々夜々の出来事。これ我がなすべきものと。これを聞けば。これを筆にし。これを見れば。これを墨にし。其書実に三百余巻に及ぶ。そもそも松浦静山公の甲子夜話二百八十巻。神沢杜口の翁草二百巻。近世隨筆の巨璧と称す。彼れ諸侯また府吏の身。その成さんも怪むべきにあらず。市井の民にして。これに超えたる編著ある。翁の如きは。蓋し世に稀れなるべし。これ口計りに非るなり。これ腹腸なきに非るなり。余の交り二十余年。今や翁逝てはや歳余を過ぐ。頃日令嗣正直君来り云ふ。先人の遺稿中。まづこの名人忌辰録を印行して。故旧知己の人々に贈らんとす。父執その幾十百人なることを知らず。然れども文学社会に於て。交り殊に深く。且久しきは先生と前田香雪君などのみ。敢て一言を乞ふと。余や物識り顔にも。今昔の世態風俗に対して。其沿革盛衰を。うそぶくは。翁の賜ものたる。もと少からず。されば其旧誼を謝せんがため。口幅ひろくも。腹中を述ぶること。かくの如し

甲午七月 如電大槻修敬白

- ⑧ 本書の編者で国文学者の嫡子関根正直（1860～1932）の序文。句読点は原文の儘。

「亡父の遺稿を刊行するゆゑよし

去年の春、父のみまかれし折より、一めぐりの正忌までに、遺稿のうち、何をがな印刷し、亡父のかたみとして、旧知のかたがたに、贈り参らせばやと思ひしに、此の書は、故人の忌日を集録せしものにて、縁なきにあらねば、かきさしの書ながら、まつこれと思ひ定めつ。

此の書は、凡そ三百年來の、学者文人儒傑の士、工術技芸の達人、奇言畸行を以て聞えたる、さらぬも何事にか一ふし名を得たるは、其のみまかりし年月日をむねとしりし、墓地も知られたる限りは、書きそへたるものにて、碑面にきざめると、諸書に散見すると、人に聞きたると、みづから搜りて得たるとを集めて、おほよそ二千九百人あり、されど高位高官の人たちは、凡て漏らせり。たまたま高貴の人を載せたるも、詩歌俳諧書画などを嗜み、風雅に遊べる類ひ、父が心のひくかたのみに止めしなり。演義講談などに名高きも、關帝博士の情死、墨夫梅魁の情死の如きは勿論載せず。これらは刑死録情死録と名づけて別にあり又俳優は始めより別集になりたれど、巻末に合綴せり。

此の書は、去年の五月より、原稿の謄写をはじめ、公務のいとまいとまに校合して、印刷に付したるは、今年の末つ方なりき。かくて四月十八日の、父が正忌までには、必、成し果さんと期したるものから、さまさまの障りありて、いつしか、そのごも、過ぎけるぞくちをしき。始めは唯、旧知の人々親族たちにのみ、贈らむの心構へなりしが、亡父の友に、此の稿本を見し人ありて、同じくは世に公にせましかばと、勧めらるゝことしばしばなり。されど此の書よ。もと、かきさしの稿本なれば、必、漏らすまじきが漏れたるもあるめり。また、誤れるもなしとは断じて言ひ難し。父はなほ補ひもし、訂しもせん志ありけむを、己れ不肖にして、さることもえせず、なまじひに世に出さんこと、なき父のため、いかゞあらむと、ためらひしが、よしや誤りたらむも漏れたらむも、己れが校補のいたらざるにて、其の責、固より己れにあり。なき父を咎むる者よもあらじ。且は大方識者の補正を得んこと、却て亡父が本意にもかなふらむと、思ひかへして、遂に人の勧めに従ひぬ。

明治廿七年七月 関根正直しるす。」

この関根正直の序文は、大正14年刊の訂正改版に「忌辰録の改版に際して」と改題して、その一部が跋文として流用された。

「忌辰録の改版に際して

名人忌辰録は、先人晩年のすさみにて、三百年來の、学者文人儒傑の士、工術技芸の達人、奇言畸行を以て聞えたる、さらぬも何事にか、一ふしの名を得たるは、其の死亡の年月日を記し、墓地も知られたる限り書きそへたり。さればたまたま高貴顯官を収録したるも、文芸を嗜み、風雅に遊べる人々のみに止められぬ。さて俳優の部は始めより別に集録せしを合綴し、又情死刑死の二録は、零紙の余筆に過ぎざれば、初版には省きしを、今回の改版に際し、一校して巻末に附したり。総じて初版は錯誤夥しくして、泉下の霊に対しては謝するに辞なく、且は大方の嗤笑も慚愧に堪へず。更に校訂する所ありしかど、己が浅学寡聞なる、猶謬れるも少からじ。重ねて識者の教を請ふ。

大正癸亥孟蘭盆会の日 正直白す」

なお文中の「刑死録情死録」は、それぞれ「情死録」「刑死録」として訂正改版に収録された。

- ⑨ 現存する「劇場年表 第十九冊」については、関根俊雄編『関根文庫目録』p.36～37に詳しい。なお、書名は「劇場年表」「戲場年表」のふた通りが記されている。
- ⑩ 「江戸の方のつくりはじめは、まだ学生時代で、関根只誠翁の「劇場年表」を土台にし、それへ自分の見つけた資料を次第に補足して、不完全ながらも一先ず輪郭だけは出来た。」(『歌舞伎年表 第一巻』「巻のはじめに」)。

参考文献

田村成義編『続々歌舞伎年代記 乾』市村座 1922

故関根只誠稿「江都歌舞伎故実(抄録)(一)」歌舞伎出版部『歌舞伎』第六年第一号 昭和五年一

月十日 168-170 頁(著者の署名なし)。(五)まで連載。同じ号に、文学博士関根正直「歌舞伎十八番の勧進帳になるまで」69-72 頁

伊原敏郎編『歌舞伎年表』全8巻 岩波書店 1956～63

伊原フサ「感謝」『歌舞伎年表』附録1 岩波書店 1956

関根只誠纂録 関根正直校訂『東都劇場沿革誌料』上 国立劇場芸能調査室 1983

冊子付録 服部幸雄「『東都劇場沿革誌料』について」

関根只誠纂録 関根正直校訂『東都劇場沿革誌料』下 国立劇場芸能調査室 1984

解題 服部幸雄「関根只誠と『東都劇場沿革誌料』」

付載 『東都歌舞伎故実 三』(翻刻井上伸子)。なお、服部幸雄の推察によれば、本書は『東都歌舞伎記事』の改題であり、その一部は「抄録」として、『歌舞伎』(第二次)に5回にわたって連載された物であるという。

索引

関根俊雄編『せきね文庫 第一期』全13冊(別冊含む) 教育出版センター 1983

関根俊雄著『関根文庫目録』『せきね文庫 第一期』別冊一

国立劇場芸能調査室『東都劇場沿革誌料 索引』国立劇場芸能調査室 1989

佐藤悟「調査報告六十七 文芸資料研究所蔵 仮名垣魯文『興画合真影人物誌賦文戯章』解題・影印 —『くまなき影』と影の文化について—」実践女子大学文芸資料研究所『年報』第21号 2002.3 163～180 頁

青木稔弥「坪内逍遙と関根只誠」京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』72(3)(通号823) 2003.3 726～741 頁